瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 28
紅玉集 …… 30
俳誌交歓 …… 31
10月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（51） …… 34
恵贈俳誌拝見（21） …… 36
特別作品「杜の都」 …… 38
他誌転載 …… 40
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞 …… 43
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
句集「故郷」共鳴句Ⅱ …… 48
妣の国父の蒼天（43） …… 50
六波羅蜜寺・建仁寺吟行記 …… 52
ひこばえ会通信（19） …… 54
エッセイ「緑の香り」Ⅱ …… 55

2012/10　第79号

今月の一句

霧雨の音に過ぎしは秋田蕗　桂樟蹊子

（平成二年作）

霧多布・納沙布の旅で得られた句である。秋田蕗の見事さを撮ろうとカメラを向けたときははらはらと霧雨が音をして通り過ぎたという。そのひととき、北海道の気候を身に沁みて侘しく感じられたようである。

隆子

PDF= 俳誌の salon

阿波路の旅

塩路隆子

一三五度の子午線に立つ日の盛り

灼くる日の鳴門海峡渦成さず

木偶小屋の引幕涼し初演待つ

緑蔭にひびく太棹太夫の座

主(おも)遣ふ黒子に汗の滲み跡

涼やかやお鶴の木偶の巡礼衣

朱を入れし浄瑠璃本に紙魚走る

PDF= 俳誌の salon

十月号光耀抄

塩路　隆子選

張詰めし童正使の祭かな　山口キミコ
畳屋の物指は尺夏座敷　笠井　清佑
激論のクールダウンよ冷し酒　坂上　香菜
高座にてやをら脱ぎたる夏羽織　塩路　五郎
蚊燻しの風道探り詰将棋　北尾　章郎
ごきかぶり独りの夜を狂はせる　竹内　悦子
子燕の旋回風が裏返す　鈴木　照子
爽やかな母の動線通し土間　小澤　菜美
祇園会の裏を差配の京をんな　国包　澄子
絵地獄の木偶の採掘滴れる　中本　吉信
母の許辞すとき遣らず夕立かな　中井登喜子
山裾に悲恋の寺や青葉照　長濱　順子
船渡御の大阪絞めや威勢よき　中村ふく子
薄明を纏ひ開花の蓮の香　西垣　順子
団扇風質素を旨の峡暮し　能勢　栄子
小五郎の潜居の跡やつくつくし　藤見佳楠子
豊かなる流れに委ね花藻かな　藤本　秀機
破れ垣を繕ふ如く灸花　増田　一代
わさび田の日よけ延々黒づくし　松田　和子

PDF= 俳誌の salon

大西日落ちて覚めゆく五感かな　宮崎左智子
ラムネ栓押す手分厚き店主かな　宮田香
水茄子の瑞々しさや風呂上り　吉田宏之
「空」「寂」のまろき墓石や夏日燦　和田郁子
蟻地獄いぢめの闇のふかさかな　渡部法子
夏萩にほほを寄せあふ道祖神　石川かおり
駄菓子屋の間口一間ゆかたの子　伊東和子
海岸の流し灯籠灯が入る　伊藤和子
格子戸に「どぢゃう」貼り紙大西日　片岡久美子
節電にフル回転の扇風機　桂敦子
鳩の羽根拾ふ夏帽王女めき　紀川和子
黒鶫に誘はれ城の森巡る　坂根宏子
憂国の弁舌煽る冷し酒　阪本哲弘
灯を入れてねぶたの武者の躍動す　田下宮子
じゃんけんのぐうの大きさ京の茄子　辻香秀
余呉の駅うす刃明りの夏の湖　辻知代子
夏痩や体重計の針鈍き　小林久子
大皿の揚げ物さはに帰省の夜　吉田希望
外野には日傘の母も地区予選　小西和子
青野へと目抜通りを山羊の群　谷口俊郎
尋ね人聞きぬしラジオ終戦忌　森下康子
水分をやたらに欲しや原爆忌　井口淳子

PDF= 俳誌の salon

地上一尺余す老舗の麻のれん　岡　佳代子
酸っぱさもほどよく和へて新牛蒡　和田森早苗
和束路の花合歓越しや磨崖仏　橋本　靖子
はにかみて浴衣デビューの幼かな　前川ユキ子
来れるかと夫の手伸びる登山かな　山崎　里美
にはか雨迷ひ揚羽と雨やどり　松田　洋子
怪談噺に暑を忘れをり寺の寄席　伊藤　純子
母系てふ家の柵半夏生草　粟倉　昌子
未草生き生きとして古火鉢　中川すみ子
「ご自由に」峡の生水の熟れトマト　松岡　和子
地蔵会の子の楽しみや袋菓子　西田　史郎
太陽を背負うて来る児夏休　大島みよし
覗き見て愉しくなれり蝉の穴　杉本　綾
露座仏を守る池頭の合歓の花　福本すみ子
手花火の煙は闇に吸はれけり　高谷　栄一
炎昼のゴーストタウンひとり行く　三川美代子
宇宙より「はやぶさ」迎へ灼け大地　板倉　安正
風のごと走るあめんぼ小池かな　難波　篤直
モノクロの絵と向き合へり昼寝覚　西岡　裕子
杉木立昼の湯町の風死せる　山本　孝夫
干梅を漬けし大壷陽のぬくみ　西村　敏子
列をなす六道辻や迎へ鐘　秦　和子

PDF= 俳誌の salon

まないたを紫に染め賀茂茄子　密田美知代
愛犬の目にも涼しさ俄か雨　宮越久子
波乗りの喚声運ぶ潮の風　山内節子
鉾の絵を描けて独りの夏祭　山田愛子
ラジオより昭和の歌や遠花火　山本丈夫
帰省の子手軽に使ふアイパッド　横田矩子
雨上り緑社の鈴絶えず　五十嵐勉
夏きざすパリ北駅に佇める　池田加寿子
下駄涼しざぶざぶ小川歩きけり　伊藤憲子
老鶯や樹海のうねり見下せる　伊庭玲子
パトカーの猛暑散らして走りけり　大越義雄
朝練の声駈け登る夏木立　落合晃
もの言はぬ母の寝息や扇風機　川崎利子
山二つ鷲掴みして雲の峰　西郷慶子
木の猿がトマトを狙ひ夜明待つ　笹井康夫
降り立てば風鈴の音や無人駅　関根ひろみ
蜘蛛の糸素顔にかかる朝まだき　竹内喜代子
土用干妣の時代の裾模様　田中浅子
草食系ひ弱さ隠すサングラス　辻香秀
南部鉄風鈴の音の澄みゐたる　津田富司

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

蚊帳

笠井　清佑

捨つる事覚えて豊か心太
畳屋の物指は尺夏座敷
リフォームを仕切る監督汗雫
長持の奥に見つけし麻の蚊帳
鉾並ぶ室町通り賑賑し
夏草に埋もるるごとし大極殿
夏料理味調へる塩糀

祇園会

山口キミコ

張詰めし童正使の祭かな
絢爛の懸装(けそう)守りて鉾の町
金襴の結びの紐や鉾動く
「エンヤラヤー」白装束に光る汗
解説のゲストに届く鉾粽
頭領のかざす扇や山廻し
夕闇に祇園囃子の遠音かな

夜の秋

坂上　香菜

激論のクールダウンよ冷し酒
ファッションを気にする男夏帽子
格好など構ってをれぬ溽暑かな
煙草止め嗜好変りて梅酒かな
ヒマラヤの岩塩ピンク風涼し
いろどりの豊かなサラダ夜の秋
化粧せずに日々過しけり残暑光

PDF= 俳誌の salon

秋の風　塩路　五郎

何とでもとれる相槌心太
高座にてやをら脱ぎたる夏羽織
遁走の妙技鮮やか油虫
掌に乗りておそれ知らざり雨蛙
水中花男の寡黙美しき
新涼や草花描く箸袋
クルーズの銅鑼の音秋の風を呼び

涼風　北尾　章郎

蜘蛛の囲の小振りになり来団地棲み
蚊燻しの風道探り詰将棋
祷り深し浄土ヶ浜の海開
涼風に熟寝を得たり浜の宿
香水と細かき手引「山ガール」
深山路をそば屋の単車岩清水
ロープウェー穂高岳より雲の峰

雉鳩　竹内　悦子

異国より暑中見舞や旅の友
入院の夫のゐぬ間の土用干
ごきかぶり独りの夜を狂はせる
大夕立三井の甍を洗ひけり
県庁は半旗を掲げ原爆忌
絶叫の蝉許します聞く我慢
雉鳩のでぽっぽうぽう明急ぐ

アンタレス　鈴木　照子

夏風邪の子が指す星座アンタレス
授業なる町の探険夏帽子
軽井沢銀座ベンツの人涼し
嬬恋のみどり玉なすキャベツ畑
山頂の湯釜より立つ雲の峰（白根山湯釜）
鎌卍の戸隠社紋青嵐
子燕の旋回風が裏返す

PDF= 俳誌の salon

背ごし鮎

小澤　菜美

蒲の穂の丈より低し遠比叡
藩蓄を聞くもよきかな背ごし鮎
茄子漬や祖母は終生京言葉
オレンジに月蒸し上がる地熱かな
をさなより気の合はぬもの生り節
京に住み山家風邸走り枇杷
爽やかな母の動線通し土間

レモン水

国包澄子

無駄話のこれも世渡りレモン水
喉ごしのビールの旨さ下戸に説き
蔓のもの這はせ青風夏座敷
初蝉や声の息継ぎ繰り返し
祇園会の裏を差配の京をんな
上席は地域の古老地蔵盆
カラフルにエアロビクスの水着かな

島泊

中本　吉信

夕凪や佐渡へ海原すべり航く（佐渡ケ島五句）
絵地獄の木偶の採掘滴れる
南風吹く立てばぐらりとたらひ舟
麻縮に哀調募る島の唄
明易し一期ひと夜の島泊
平和時にまさかの被爆原爆忌
優先席今悠然と甚平翁

安曇野

中井登喜子

山霧や友と唄へる青春歌
放たるる牛が身を寄せ驟雨なか
ペダルこぐ友の背を追ひ青田風
緑蔭を出て安曇野音のなき
香を運ぶ風をたどればラベンダー
母の許辞すとき遣らず夕立かな
手に包む水密桃を慈しみ

PDF= 俳誌の salon

涼しげ

長濱　順子

梅雨晴間女人交へし蹴鞠かな（京都日峯神宮）
歓声に長老の蹴り夏の空
夏柳白砂軋み鞠の庭
草庵の苔の潤ひ青葉雨（祇王寺）
涼しげに寝そべる猫や控の間
山裾に悲恋の寺や青葉照（滝口寺）
向日葵を揺らし嵐電進みけり

短夜

中村ふく子

七夕や波のさらへる星の数
船渡御の大阪締めや威勢よき
へろへろと鴉近づくとまと畑
短夜やメダルに老のハイタッチ
久々に揃ふ家族や門涼み
両親も兄も騎るらん茄子の馬
脳天へキーンと響くかき氷

蓮の寺

西垣　順子

籤改めの扇ひと振り鉾進む
注連を切る児の声高し鉾祭
祇園会や四代に亘る籤改め
薄明を纏ひ開花の蓮の香
花散りて花托を高く蓮の池
青女の滝流るる先の白き蓮
一木彫の菩薩膨よか蓮の寺

凌霄花

能勢　栄子

凌霄花の不法侵入垣根越え
高々とビールのジョッキ浜の宿
団扇風質素を旨の峡暮し
トマト添へひとりの夕餉華やげる
閑けさのおはぐろ蜻蛉遊女塚
十薬の続く裏道風白き
夕風やわさび利かせて冷奴

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

夏痩

小林　久子

夏痩や体重計の針鈍き
大の字に昼寝する児の片笑窪
茎揺れて浄土の風や蓮の池
端居して季の移ろひや風一陣
盆供養遅刻を詫びる僧の息

原爆忌

吉田　希望

大皿の揚げ物さはに帰省の夜
遠花火女三代庭に出づ
指に添ふ指輪歪めり原爆忌
新聞のめくれ軽やか今朝の秋
髪を結ふ位置高くせよ涼新た

揚羽

小西　和子

外野には日傘の母も地区予選
日焼濃し控投手に出番無く
夏芝に全身ジャンプ逆点打
揚羽来て心の余白広げけり
節電をうたふ事々枕蚊帳

山羊の群

谷口　俊郎

糞しつつ草食む牛や夏の谷
牛の嫌ふ花々誇る夏野かな
お花畑低し谷間のどこまでも
青野へと目抜通りを山羊の群
風涼し電気自動車占める街

尋ね人

森下　康子

魂迎四年を重ね数珠を繰る
踊り手は婦人会連後につく
竹撓るほどの願ひや星まつり
プロ並と豪語の乗馬日焼の児
尋ね人聞きゐしラジオ終戦忌

PDF= 俳誌の salon

十月号月評

塩路　隆子

張り詰めし童正使の祭かな　　山口キミコ

一連の祇園祭をテーマの一句である。祇園祭の中で男児の占める役割りは重い。太刀で綱をきり、それから長刀鉾の巡行が始まる、と言うことはすべての巡行が始まることであり、その責任の重さは言うまでもない。したがって児の緊張は頂点に達するのであろう。「張り詰めし」の措辞がその緊張を表している。「正使」とは主たる使者の意で、当日の一番大切な神の使者であることを表す。選ばれた童の緊張をうまく句にされた。流石の力量である。

畳屋の物指は尺夏座敷　　笠井　清佑

七十七号で「バリアフリーの設計書」の句を拝見したがやっと終わりに近づき、畳屋さんが入られるようになったかと共に安堵の気持を味わっている。改装の経験は筆者にもあるが、住みながらの改装はなかなかエネルギーの要るものである。ご苦労さまでした。

さて畳屋がいまでも尺をまもっているとは知らないことであった。作者の驚かれた様子が伝わる。ちなみに和裁は何時やら程に、センチを使うようになっている。昔の建築そのものが尺であれば当然畳も尺の筈、面白いところに目を付けられた。改装により得られた秀句も大きな収穫だったと言えよう。

激論のクールダウンよ冷し酒　　坂上　香菜

先月にちらりと作者の句に変化が見られたが、今回はがらりとかわられた作者の変貌に賞賛の拍手を送りたい。元来作者は吟行句を得意とされ、しかも人間を、風俗を出さない句が多かった。随分と句域を広げることをお奨めしたが、今回の七句を拝見し驚いた。今後も是非句の幅を広げて頂きたいと思った。さてこの句の「クールダウン」のもとの意味は「運動などののちに体を軽く動かしながら、息を整え、血流を落ち着かせる」ことを言う。激論の後冷し酒でその興奮を抑えたなど、面白い作品に仕上がった。

高座にてやをら脱ぎたる夏羽織　　塩路　五郎

この程、桂三枝が文枝を襲名し、連日のように新しい文枝師匠の高座が披露された。古典の面白さというのは

PDF= 俳誌の salon

一応落ちも承知の上で鑑賞しているが、新作落語の面白さはその展開にある。長屋の店子と家主のやりとりをかけ離れた茶飯事に、ついつい引き込まれるものがある。落語家と言うのは、高座へ上がると丁度本題に入る頃を見計らって、するりと滑るように羽織をぬぐのがまた芸の一つになっている。面白い句に仕上がった。「瓊」で高座の句が出てきたのはこの句が初めてである。

PDF= 俳誌の salon